宰府画報

第21号

2024年1月
（令和6年）

発　行
太宰府市教育委員会
文化財課

太宰府図 部分

逸品探訪

博多太宰府図屏風

齋藤秋圃作

向かって左の画面に博多湾と福岡城下の風景、右の画面には太宰府が誇る宝満山、天満宮、観世音寺などの名所が描かれた《博多太宰府図屏風》。齋藤秋圃の代表作のひとつです。天満宮参詣、いわゆる「さいふまいり」で賑わう参道の光景が描かれることから郷土史関連の書物に挿図として用いられることも多く、ご存じの方もあるでしょう。

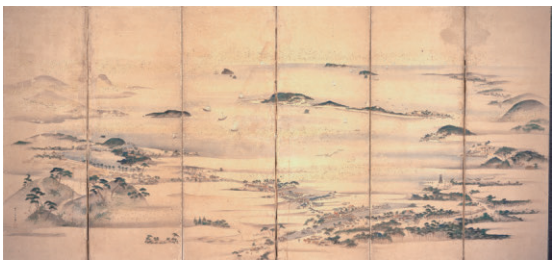
73歳の作で、齋藤秋圃はこの頃から太宰府に移り住み、亡くなるまで約20年近くの年月をここで過ごしました。住まいの場所は明確ではありませんが、現在の光明寺前の「国博通り」周辺だったようです（『宰府画報』第3号・朱雀信城「齋藤秋圃の住まい」参照）。本屏風で言えば参道の右辺り、霞に覆われている部分に当たります。

あらためて下の全図を見てみましょう。博多図、太宰府図ともに、高い位置から見下ろすような、いわゆる鳥瞰視点で描かれています。名所図などで一般的に用いられる手法で、絵師は必ずしもその場所を知らずとも、参考となる図や地誌等をもとにしてこのような絵を描くことができるのです。

ではいったい秋圃はどうやってこの図を描いたのでしょうか。もう一度全体をよく見てみると…、あっと気づいた方、そうです。天拝山山頂の展望所から見渡すと、まさに右手に宝満山と太宰府の町、前方遠くには博多湾が見えるのです。

実際に町を歩く人まで見えたわけではないはずですが、秋圃はきっと天拝山に登ってこの景色を見たにちがいないと思えてきます。

（井形栄子）



6曲1双　紙本著色　屏風装　各160.5×340.2cm　天保15年（1844）頃　個人蔵（九州歴史資料館寄託）

調査見聞

王治本（おうちほん）と菅原道真（すがわらみちざね）

―拝山との合作をめぐって―

拝山と交流した清国の文人

吉嗣拝山が交流を持った文人には清人も含まれています。その中に王治本（1835～1908）がいます。字は維能で、黍（漆）園と号した浙江省慈谿（じけい）の出身の人物です。明治10年（光緒3年、1877）に来日し、滞在中には各地を巡り、在地の文人たちと漢詩の応酬をして交流を深めていました。この王治本が拝山のもとを訪ねたのは明治20年仲春（2月）のことです。拝山は王治本に骨筆（こっぴつ）を見せて、詩を書いてもらっています。また自筆の菅原道真の画に賛も書いてもらっています。前置きが長くなりましたが今回紹介するのがこの《菅原道真像》の王治本の賛文です。

菅原道真像
絹本著色　掛幅装
68.8 × 26.4㎝　吉嗣家資料

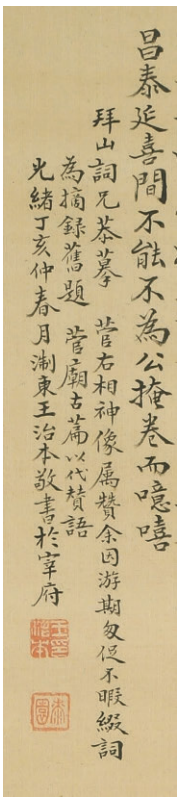
諸葛孔明（しょかつこうめい）になぞらえて

この賛には道真の人生について書かれています。「吾嘗読史、至昌泰延喜間、不能不為公掩巻」（歴史書を繙き、昌泰・延喜年間の道真の半生を読み進めていくと、感じるところがあって読むのを中断した）と記しており、清人の王治本の目から見ても道真の人生は壮絶なものであったようです。また政治の手腕は「済世経綸邁管楽」（天下を治めることは管仲や楽毅を超えている）と述べており、中国の春秋戦国時代の名宰相管仲（かんちゅう）と名将楽毅（がくき）を超えていると思ったようです。賛文は褒め称える文ですから、その点は考慮しなければなりませんが、道真を評価していたことが分かります。また「尽瘁效諸葛」（全力で尽くすことは諸葛孔明に倣う）とも述べています。孔明は管仲と楽毅に匹敵すると言われていましたので、王治本は道真を孔明になぞらえていたのかもしれません。

旧作を再利用

最後に「不暇綴詞、為摘録旧題」（賛を創作する時間がないので以前に書いたものから選び出して書いた）と述べています。王治本は明治19年に周防を訪れており、その折に防府天満宮（当時は松崎天満宮）に立ち寄り「防府菅右相廟謹賦」を書き残しています。こちらも道真について書いたものですが、今回取り上げる賛文と比較するとほとんど同じ文言であることが分かりました。これが王治本が言っている「旧題」だと考えられます。太宰府を訪ねた明治20年仲春には久留米にも行っていることが分かっています。王治本の人気は相当なもので、訪問地では引っ張りだことなり、忙しかったようです。この賛文からは王治本の正直な人柄も見えてきます。（木本拓哉）

【賛文】
緬想公自寛平初超擢翰院登鼎司濟世經綸邁
管樂匡時事業擬皋伊獻可替否尊王室威権未
許戚臣移明良相慶纔十載天皇倦勤超退思君
臣之遇不終合讒毀之言從此滋慷慨避位三上表從
容諫獵二二詞鄙哉博士生妄議漫云明哲見機遲公
以此身作砥柱一去一留關盛衰唯願盡瘁效諸葛不
願避毓學范蠡海西之行亦夙料臣罪當誅復何辭
幽廬相對唯書卷荒逕栽植有楳枝毎日焚香拜恩
賜愁逢佳節賦新詩悠悠謫居過三載樞星夜墜
筑水湄嘆息一蹶不復起道之窮也命為之吾嘗讀史至
昌泰延喜間不能不為公掩巻而噫嘻
拜山詞兄恭摹　菅右相神像属贊余因游期匆促不暇綴詞
為摘録舊題　菅廟古篇以代賛語
光緒丁亥仲春月淛東王治本敬書於宰府



落款部分

【参考文献】
・三浦一竿『江漁晩唱集 附録』（三浦萬里、1909年）
・柴田清継「明治二十年前半における王治本の足跡と詩文交流―九州北部、小豆島―」（武庫川女子大学大学院文学研究科『日本語日本文学論叢』第8号、2013年）
・柴田清継「王治本の周防訪問および地元文人との文藝交流」（『武庫川女子大学紀要』人文・社会科学編・60号、2013年）

いちまい
画稿鑑賞

齋藤家資料
鯉の滝上り図

ことしは辰年、齋藤秋圃も辰年（安永元年）の生まれでした。その秋圃の画稿のなかに鯉の滝上り図があります。登龍門図とも称し、龍門の急流を越えることのできた鯉は龍になるという中国の言い伝えにもとづき、吉祥の絵としてつくられます。

この画稿では画面中央に立ちあがったかのような巨大な鯉が描かれています。上方には淡墨線の水流が垂直に落下し、尾鰭の周辺の水しぶきは波濤のようにせりあがっています。滝を遡上しようと飛び跳ねた、まさにその瞬間の鯉をとらえたものでしょう。

鯉はしばしば描かれますが、この画稿の鯉は通例の鯉とはすこし違っています。前方を見据える鋭い目差、ひとの顔でいえば眉にあたる部分には鋸の歯のような凹凸が描かれています。口元からのびる髭は太く長く、胸鰭は扇形に大きく開き、その鰭条の先端は針のように尖っています。腹鰭にも尾鰭にも、縁の部分には薔薇の棘のような突起がならんでいます。これらはいずれも龍の表現に通じます。さらに、鰓蓋上端近くの濃墨部分には「角ニ成骨カ」と記されています。この鯉は龍になることがすでに約束されているようです。

流浪と研鑽の時を経て秋月藩の絵師に召しだされた秋圃は登龍門を果たした絵師といえるでしょう。いささか異形のこの鯉には無名時代の秋圃の姿がかさなります。（小林法子）

紙本墨画　67.0 × 24.0㎝

メイショ
メイブツ

竈門神社の注連柱

宝満山に鎮座する竈門神社は、縁結びの神社としても有名で多くの参拝者が訪れます。駐車場から石段と鳥居を通り、本殿・社務所に続く階段の登り口までたどり着くと、左右には人の背丈を越える注連柱が建っています。右の石柱には「春秋厳祭享」、左の石柱には「上下粛容儀」と書かれています。春秋は厳かに祭りをおこない、上下は慎んで振る舞うという意味でしょうか。本殿に向かうにあたり、気の引き締まる思いがします。

この石柱は裏面の刻字から大正12年（1923）に田原晋という人物によって寄進されたことが分かります。左側の石柱をよく見ると文字の下に落款が彫られています。「吉嗣」「鼓山」と読め、これは太宰府の文人吉嗣鼓山が揮毫したものだと分かります。この時鼓山は45歳で、大正9年、11年には御前揮毫をおこなうなど、文人として充実した時期だったようです。

過去の宰府画報（第2号）でも紹介したように、同年には坂本八幡宮の注連柱も揮毫しています。他にも太宰府市内外での石造物への揮毫も数多く残っており、その人気ぶりが窺えます。（木村純也）

神社に向かって左の石柱の正面下部に刻まれた、吉嗣鼓山の落款。

関係者名鑑 Vol.1

仙厓義梵（せんがいぎぼん）

生没年　寛延3～天保8（1750～1837）
関係者　齋藤秋圃、吉嗣梅仙

プロフィール

臨済宗の僧。美濃国の人。若くして出家、19歳で武州の月船禅慧（げっせんぜんね）に参じたのち諸国を遍歴。40歳で博多聖福寺の第123世住持となる。62歳で隠居するも87歳で125世住持に再任。同寺の伽藍（がらん）整備に力を注ぎ、晩年は軽妙な筆致と機知に富む禅画を多く描いて人気を得た。享年88。

「博多の仙厓さん」として親しまれる仙厓は、太宰府とも関わりが深く、宝満山の頂上近くにある大岩に刻まれた仙厓揮毫（きごう）の「仙竈」の書など、その痕跡を確認することができます。また、齋藤秋圃とは懇意の仲だったことも知られます。聖福寺には仙厓の涅槃図や肖像画などの秋圃作品が現存し、齋藤家資料にはその聖福寺の仙厓図の構想段階のものと思われるスケッチがあって（『宰府画報』第7号・日野綾子「仙厓像」参照）、両者の関係性を確認することができます。

さて、今回の絵師調査事業では、吉嗣家資料の中から、梅の枝を手に持った渡唐天神図と、「梅仙舎」と揮毫された扁額（へんがく）の2点の仙厓の作品が確認されました（写真）。伝来の経緯は不明ですが、天神図は吉嗣家が天満宮の社（しゃ）家につらなる家であること、扁額は吉嗣梅仙の雅号（がごう）に関わるものかと推察されます。齋藤秋圃のみならず、あるいは秋圃を介して、仙厓は吉嗣家とも交流があったようです。（井形栄子）

（右）渡唐天神図
　紙本墨画　掛幅装　68.5 × 29.9㎝（現状）
（左）書「梅仙舎」
　紙本墨書　扁額装　75.4 × 159.5㎝
いずれも吉嗣家資料

ひとことくずし字

【一笑百慮忘】

笑いには様々な効用があり、健康になると同時に人生を充実させます。近代の文人もそういった想いがあったのでしょうか、今回は吉嗣家資料から「一笑百慮忘（いっしょうひゃくりょぼう）」と刻まれた印章を紹介します。「一度笑うと百ある嫌なことを忘れてしまう」という意味で、笑うことの大切さを教えてくれる縁起の良い言葉です。

画像を見ると、「一笑百」はほぼ原形のままですが、「慮」は「卍」と「界」がくっついたような文字に、「忘」は上部の「亡」はそのままに「心」の箇所は象の鼻のようにも見えます。篆書体ではよくみられる形です。

印章の外観は全面に岩と樹木をあらわす、精緻な細工が施されており、制作技術の高さが窺えます。側款（そっかん）に記される作者と思われる「葉墨卿」は清国永嘉の人で、拝山と同年代にあたる篆刻家です。制作年代は不明ですが、拝山が清国に渡航した際に会って入手した可能性も考えられます。

笑うことを大切に思う気持ちは日本だけでなく世界共通なのかもしれません。（木村純也）

この資料

印面　3・6×2・4㎝
総高　5・6㎝
材質　石製
作者　葉墨卿
吉嗣家資料

編集後記

レイアウトをリニューアルしA4サイズで文字が大きくなりました。今号は新年に相応しい縁起の良い記事になりました。（木）

新コーナー「関係者名鑑」では、齋藤秋圃や吉嗣三代にゆかりのある絵師や文人たちについて、関連資料とともに紹介します。（井）